



10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

1 生産販売状況

3番果房は、3月下旬に出荷ピークとなりましたが、「芽数が増えず、果数が少なかったこと」、「温暖の影響で小玉だったこと」等で4月上中旬の出荷量は前年比65%と大きく落ち込みました。(図1)
4番果房は、昨年と比較して出蕾の揃いは良く、早いところでは収穫が始まっています。

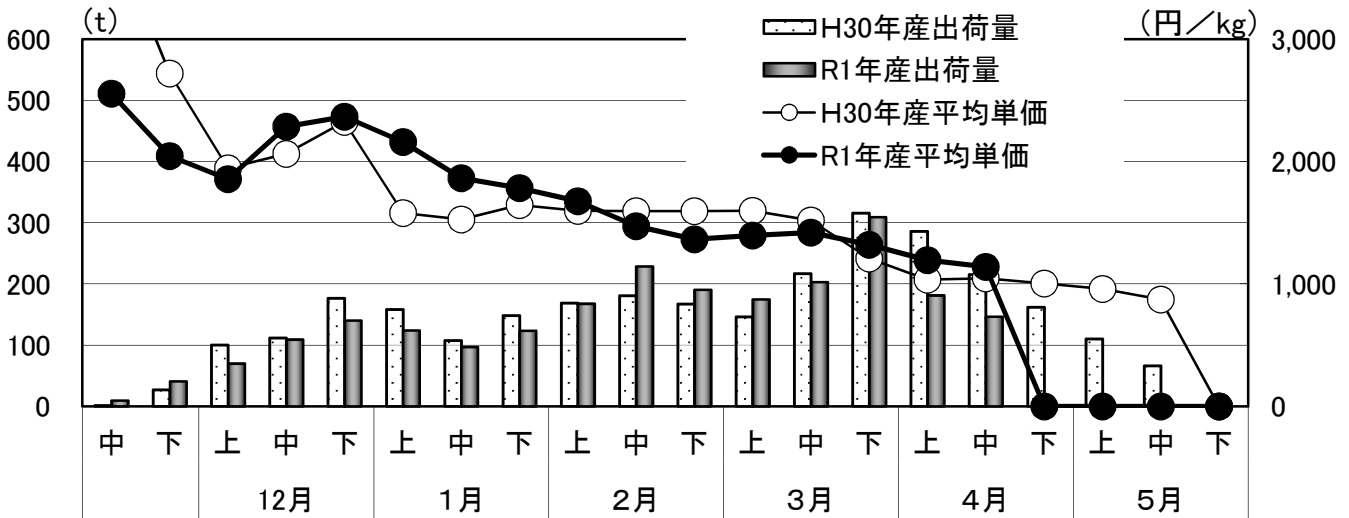


図1 J A福岡大城のイチゴ総出荷量と平均単価の推移

2 親株の状況

暖冬の影響で親株の動きだしは早く、2月中旬頃から心葉が展葉し始めたほ場もありましたが、現時点では例年よりランナー発生が遅れているほ場が多く見られます。また、今後は高温・乾燥による水分不足や窒素欠乏が懸念されるため、十分なかん水管理、肥培管理を心がけましょう。また、温度上昇に伴い、病害虫の発生も増えています。炭そ病を中心とした定期的な防除を徹底しましょう。

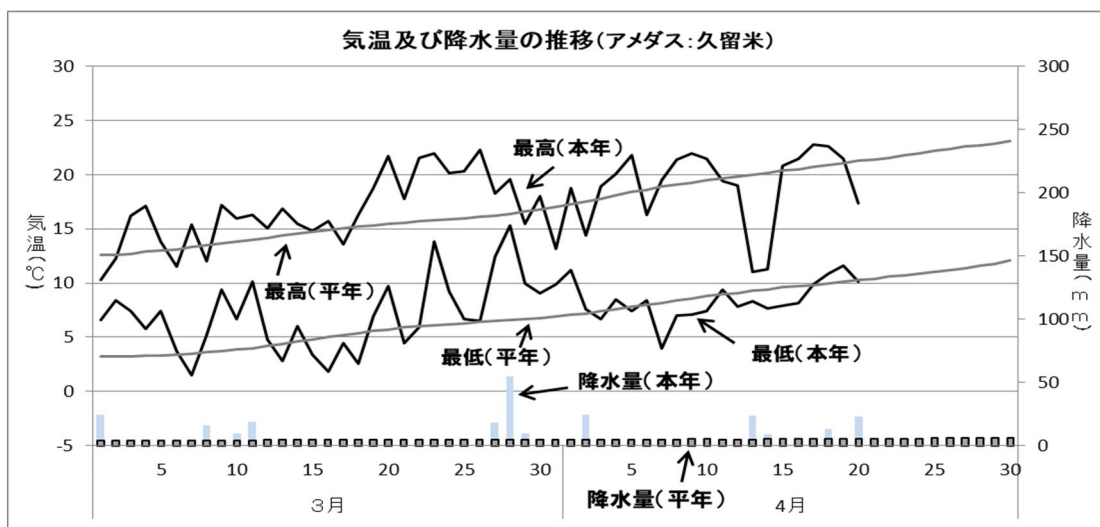


図2 気温及び降水量の推移 (アメダス久留米より)

3 今後の管理

(1) 本ほ管理

傷み果の発生を防ぎ、更なる収量アップを図りましょう。

<軟果・傷み果対策>

- ・収穫作業は高温時を避け、着色基準を遵守する。収穫日の間隔は短くする。
- ・サイド・谷・妻面を開放し、換気を充分に行う。
- ・収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねを避け、直ちに予冷庫に移す。
- ・収穫後の少量多回数かん水に努める。
(土壌水分の目安は、pFメーターで1.7~1.8、軟果が多い場合は2.0程度)

(2) 親株管理

親株の乾燥や肥料切れ並びに不必要な下葉及び花蕾の除去の遅れは、生育の遅れやランナー発生の遅れに繋がるので、早めの管理を行う。

<ランナー発生促進>

- ・こまめなかん水と施肥を行う。特に、プランターは乾燥しやすいので、株元にかん水チューブを設置し、確実に株元にかかるようにこまめにかん水する。また、5月上旬までにIB化成S1号を5~10粒/株施用する。

<下葉かきと花蕾除去>

- ・不必要な下葉及び果梗(花蕾)は、早めに除去する。
ランナーの発生を促進するために、親株の負担を軽くする。

<ランナー配置>

- ・風雨によってランナーが1か所にかたまってしまうと子株が徒長するため、ランナーを均等に配置する。また、通路側に出ているランナーを畝内に配置する。

<病害虫対策>

- ・「炭そ病」は予防散布の徹底が重要
1枚展葉する毎(7~10日毎を目安)に定期的な予防散布を行う。
「炭そ病」は降雨などで感染拡大するため、降雨前後の防除を徹底する。
元年度産で「炭そ病」が発生したほ場では、親株も感染している恐れがあるので、「うどんこ病」と併せて定期的な予防防除を行う。
- ・アブラムシ・ハダニ類の発生が見られる。また、今後うどんこ病やアザミウマ類(スリップス)・カキノヒメヨコバイの発生が懸念されるため、適期防除を行う。
- ・雨よけ栽培を行う場合は、風通しを良くして多湿にしないよう注意する。
- ・毎年一部で「萎黄病」や「疫病」の発生が見られるので、常に親株の生育状況を観察する。

(3) 育苗準備

<育苗床の環境>

- ・育苗床は、風通しが良く浸冠水のない排水良好な場所を選び、万全な排水対策を行う。
- ・苗の徒長防止や炭そ病予防のため、ポットの中心間隔を 18cm 程度確保できるように、育苗床は十分な広さを確保する。
- ・うねは、中央部をやや高くし（かまぼこ状）、水がうね上に溜まらないようにする。
- ・床面には古ビニルを敷き、さらに、ポットシートやマリックスシート等を上に敷く。

<育苗培土>

- ・培養土は、排水性が良く、土がしまりにくいものを選ぶ。
- ・培養土量の目安は、8,000 鉢当たり 3.5 寸ポットで 4 m³、3 寸ポットで 2.5 m³とする。
- ・「炭そ病」が発病した場合に、発病株及び周辺株を除去出来るように、苗本数は 2 割程度多めに準備する。

<鉢上げ>

【さしポット】

- ・マルチフィルム上に稲わら被覆を行った後（写真1）、かん水施設を
設置し、採苗 1 週間前からかん水して子苗の発根を促進する。
- ・乾燥状態では、親株の生育やランナーの発生が抑制されるため、親株
に十分なかん水を行う。
- ・作型に応じて目標とする鉢上げ時期（6 月上中旬）までに作業で
きるよう、育苗ポットの準備を計画的に行う。



写真1 全面マルチ+稲わら

《 目標鉢上げ時期 》

8月処理開始の株冷	⇒	6月10日まで
8月処理開始の夜冷 9月処理開始の株冷	⇒	6月15日まで
9月処理開始の夜冷 普通ポット	⇒	6月20日まで

【すけポット】(写真2)

- ・根がこぶ状になった苗を鉢に受け、ランナーピン等で止める。
- ・大き過ぎる太郎苗は鉢上げせず、全葉を除去する。
- ・ランナーが、極端に細い子苗は使用しない。
- ・鉢土が乾燥すると根の伸張が悪くなるため、乾燥させないように
かん水を行う。
- ・鉢受け作業前後の炭そ病防除を徹底する。
- ・鉢受けは、5月末までに終了する目標で行う。
- ・鉢受けが終わったら、苗の生育促進のためランナーの先端をピンチし、
苗の徒長防止と病害虫予防のため、親株の全葉摘除を行う。



写真2 すけポット

※充実した苗を作るには、採苗時期が遅れないようにする。

そのためには、計画的に早めの作業を行うことが重要!!

畦作 「親株におけるイチゴハナゾウムシの発生に注意しよう」

親株においてイチゴハナゾウムシの発生が見られます。ハダニ類、アブラムシ類等の主要害虫に対しては防除を徹底していると思いますが、マイナー害虫では症状を知らないことで対策が遅れることもあります。そこで、近年、親株期及び育苗期において増加傾向にあるイチゴハナゾウムシについて紹介します。

1 生態

イチゴ、バラの害虫として知られており、越冬成虫はイチゴが開花を始めると集まり、蕾のがくに孔を開けて1粒ずつ産卵する。年発生回数は1回で、新成虫は6～7月に出現し、新葉、花弁、果実を食害する。しかし、近年、温暖化の影響で発生時期が早まっており、現時点で親株ほ場において発生が見られている。



写真3 イチゴハナゾウムシ成虫

※日本農業害虫大辞典より引用

2 症状

- ・葉と葉柄のつけ根付近で切断され、葉が枯死する。
- ・切断部周辺には吸汁痕が見られる。



写真4 症状（親株）



写真5 症状（育苗期）

※イチゴハナゾウムシが発生した場合は、防除方法について、普及指導センター又はJAにお問い合わせ下さい。

～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～

”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！